

田中千禾夫戯曲全集 第五卷(全七卷)

定價 八〇〇円

著者略歴

一九〇五年生
一九三〇年慶大仏文科卒

劇作・演出専攻

昭和二九年度読売文学賞受賞

昭和三四年度岸田演劇賞受賞

昭和三四年度週刊読売戯曲賞受賞

昭和三四年度文部省芸術選奨受賞

主要著書

「物言う術」

著者 © 田中千禾夫

発行者 草野貞之

印刷者 山田博

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(29)七八一一(代)

振替東京三三二二八

山中千禾夫戯曲全集

5

白水社



伐る勿れ樹を 新人会

野に下る右近 俳優座小劇場





鈍琢亭の最期 俳優座



目次

ささやきの竹	七
無邪気なひとびと	三五
伐る勿れ樹を	五
野に下る右近	一五
鈍琢亭の最期	二五一
むしう・とがき	三七五
解説	三九
石沢秀二	

文楽人形劇

ささやきの竹――お伽草子より――
二幕

登場人物

西光坊

関白

尉

尉の妻

娘

第一幕 第一場

（本舞台の前に叡山、左に少し低く鞍馬山があり、鞍馬寺本堂の屋根をあしらい、その下に雲が横に流れ、その下に京都の家々の家根がある風景。）

（季節は秋。）

〽山は紫、水澄んで、京都の名物かずかずあれば、いちいちいうたらきりがない。

〽今日只今とり立てるのは、すべてこれ鞍馬山、鞍馬石、鞍馬苔、鞍馬天狗に鞍馬炭、それぞれ鞍馬の竹もある。

あるけどないもの、そりゃなんじゃ、そりゃ恋じゃ。

〽秋の都は美しく、人々静かに住み暮らすに静心なきは何故ぞ、また何者ぞ。時の宰相関白殿が侍姿に身をやつし都大路の行き交いに、まぎれて迷うも恋の道、想う女人は何処かと、探し求めて今日もまた、ただ当てもなく通りすぎる。

男女の通行人、大原女、僧などが通る、その間を縫って、扇で顔をかくすようにして身分の低い侍姿の関白が、人を探す心持ちで通る、かつぎをかぶった女を下から窺ったりする。

〽木石ならぬ人間なら誰しも恋はするもの悩むもの、されば仏に仕える坊さんとして、この道ばかりは別ではない。

身の丈ほどの竹を杖代わりに、西光坊が現われた。

〽さてここに、弘法めでたい日本だから、鞍馬山にも寺がある、女人禁制の寺がある、その鞍馬寺

の聖にして、年はとってもがっぷり遅しい荒法師、名産鞍馬竹を杖代わりに、のっしのっしとお
でました。そこへまた来なかったさっきの侍、魂も抜けたように、うっかりぼっかり、うっかり
ぼっかり。

関白、考えごとしながら歩いていたので、法師に突きあたった。

西光坊 「あいたた、気をつけろ。」

関白 「あ、これは考えごとをしておった故、平に許せよ。」

西光坊 「許せよだと、やいやい、己れを何と心得えなさる、」

「名もない侍の姿だから無理もないが、関白殿とは露知らず、相手を下人と侮って叱りつける。

西光坊 「鞍馬寺の大僧正、西光坊を知らぬかやい。」

関白 「さてもさても、そのように名高い御坊ならば、ちとたずねたいことがおりやる。」

西光坊 「なんと。」

関白 「高間の山に住むという美しい姫を探しておりやるが教えてたもれ。」

西光坊 「はは……どんな女か知らぬがお前如き下人にはとても及ばぬ高間の山の峯の白雲、あき
らめい、身のほど知らぬ奴、はは……。」

関白 「笑わば笑え、恋の情を知らぬ出家沙門に用はない。」

「またもや巷にさ迷い消える、あと見送って西光坊。」

西光坊 「そう見縊ってもらうまい、なるほど俺は出家沙門なれど、七十歳のこの年まで勤行に明
けくれて女の肌は知らないが、あの娘に会うてからは気が変わった。わがお釈迦さんだって女房
もらい子を生ました。凡夫のこの俺がそれ見習って何が悪い。親たちが俺を信用しているのを倅

い、あの娘を外に連れ出し、二世の楽しい思い出し、おおそれそれ。」

「と、これもまた恋に狂える迷いの道、道に落ちたる棒を拾い、はてさて何に使うのか、竹の節打ち抜いて娘の家へと乗りこんだり。」

第二場

（下手、正面に仏壇を飾る広い座敷と上手襖で仕切られた小部屋。）

「ここは二条の小路に左衛門の尉といって心正しく慈悲深く商売繁昌の家があったが、ひとり娘をいたわって、和歌はもとより歌舞管絃まで仕込み、立派な掬お授けあれと西光坊が鞍馬寺は毘沙門天に願かけたのもいわれのあること。」

きょうはその満願の日。

「さあさあ、仏前で言いきかせることがある」

と夫婦は娘をつれて仏間へ入った、左衛門の尉はあらたまり、

「これ娘よう聞けよ、久しくわれら子宝にめぐまれません、日頃信心の鞍馬寺の毘沙門に祈り申したれば、不思議やみこもって生まれたのがそなた、されば、そなたは毘沙門の申し子只者の嫁にはやれませぬ。」

「「そうじゃ、そうじゃ」

と妻も膝乗り出して

「こんな立派な娘ならお公家様の姫様にもひけはとらぬ」

と自慢すれば、娘は顔赤らめて差し俯く、尉は更に語をついで、

尉 「よいところへ縁づかせ安心したいものじゃが、あれこれ思い患うより、西光坊へ御願ひし毘

沙門のお指図にお任せした。」

妻 「きょうはその満願の日、きつとよいお告げがありましようぞえ。」

「するとこのとき声あって、

「西光坊、只今それへ」

とすいと出て、例の竹をば下におき、

西光坊 「いかにも今日は満願の日、今日今夜、わが精魂こめて祈り明かすによって、娘を残して

者どもは早や退つて休まさつしやい。」

「こは有難い仰せかな、はあ」

とばかりに夫婦の者は、早々に引き上げれば西光坊

「まからじゃや、やくかしやはたは」

独鈷を持って鈴を振り、数珠くりながら、娘の顔を斜に見て、心のうちに思うよう、

「見れば見るほど美しい。丹花の唇、にほやかに、雪の肌の清らかに、こんな可愛い女をば手に入れないで何としよう」

ずしりと寄って手をとれば娘はいとも恥ずかしげに、逃げるように内に入った、

護摩壇の火のみ明々と、物の音絶えて夜も更けた。

「もうよからう」

と西光坊、しびれを切らして立ち上がり、隣の寝息うかがって、襖のあいだを少しあけ、竹筒とって差入れる。

（上手の部屋の襖を上手に引く。）

（隅の衣桁に婚禮のうちかけがかかっている。尉夫婦が寝ているその枕元に竹筒の先が届いた。）
「その竹筒に口を寄せ、声を作りささやいた、ささやいた……」

西光坊 「いかに左衛門の尉夫婦、忝くも我こそは鞍馬の大悲多聞天なり、娘の縁を結ぼうなら、急ぎ鞍馬山にのぼせ西光坊が許へ行かしめよ。女人禁制の山なれば娘は長櫃の中に入れてのぼせよ、もしこの義を否となら、汝が家に大事が起こる。そのとき我を怨むなよ。あなかしこ、あなかしこ。」

「再び竹をとりおさめ、そ知らぬ顔して、経読んだ。」

「のうまりらたのう、たらたらやあ、あたきやうほたら、やちしやわ……」

夜も白み始めたので夫婦の者は起き出でて、間の襖をそつとあけ、恐る恐るに申し出る。

尉

「いかに西光坊様、さきほど不思議な夢の中に毘沙門様のお声がして、娘を鞍馬へのぼせよ、縁をさだめてとらさんとの御事です、いかが取りはからいましょう。」

「うまく行った」

と西光坊、さあらぬ態で申すよう。

西光坊

「されば深く娘を思し召すことなればお断わりするに及ばない。だが毘沙門は不浄を嫌われ、まだ一人の女人も寺へ上がったことはない。長櫃にかくし入れたまま、日暮れを待って内陣へ運び入れよ。」

「折りから娘立ち出でて」

「御坊様、定めしお疲れ」

と熱い茶を差しだし、退ろうとするを父親呼びとめて、

尉 「娘、毘沙門、示顯したもうたぞよ、お前を再び山へ召し上げるとのお仰せじゃ、なんとうれしいことではないか、」

娘 「ええ？」

「と娘はおどろいた。

「これはまた悲しい仰せかな。大恩あつき親様を棄てて、何でお山へ上れましよう。いやじゃ、いやじゃ、」

と泣きながら、膝へすがって掻き口説く、尉の妻も同じく涙。

尉の妻 「尤じゃ尤じゃ、しかし毘沙門の後楯でよい殿御に添わせて下さろうとの思し召しにちがない。別れは辛い、一時の辛さ。早速にもお山へ上がるこしらえを。」

「と涙をはらってすすめるが、娘はなおも泣きじゃくり、

娘 「母様父様に別れるくらいなら死んだ方がましじゃ。殿御などいりません。いつまでもお傍にいたい。殿御はいやじゃ。男はいやじゃ、私は一生嫁にはいきません、いきません。」

「母はさすがに女の身、もとより離したくはなし、泣きつかれては情に脆い。

「のう、こちの人」

と、とりなして、

尉の妻 「これほといやがるものならば、今しばらくの御猶予を願い、よき日をえらんで我ら共々鞍馬へ上がってはどうでしょう。」

「西光坊、からからと笑い出し。

西光坊 「はは……、おろかなことを言わっしゃる。毘沙門、さいぜん、何と言われた、もしお家

大事と思われるなら、夢のお告げの通りにせねばならぬわい。さて拙僧はこれにて、」

「長引けば事面倒」

杖の竹ならぬささやきの竹掻い抱き、怒ったように出て行った。尉は氣を取り直し。

「めでたい門出、祝言の盃じゃ、者ども、酒を持って参れ。また長櫃を持ってこい」

と呼ばわった。さすがに強きは男なり。妻も涙振り切って、次の間から娘の晴れ着の打ちかけをとってきて、

「これ見や晴れ着はこの通り」

と、まるで自分が嫁にいくようだが、親の情の有難さ。

（この間侍女たち、瓶子と三宝とを持って出て真中へおいて去る。）

（二人の下人、長櫃をかついできて、下座に据え平伏した。）

尉 「念無う早かった。その長櫃をかついで鞍馬へ上がれ、中の荷物はこれなる娘じゃ」

「へーっ鞍馬へとな」

二人の下人おどろいて顔見合わせるが、尉はさらにおっかぶせ。

尉 「しかしこのこと他言無用。

娘のめでたい輿入れじゃぞ、よいか。こちらの支度できるまで思う存分のんでくれ、祝いの酒じゃたつぷりのめ、だがくれぐれも他言無用。」

「妻は娘を促して、奥で着換えと先に立つ」

「誰にも言うな」

と念をおし、尉も奥へ入りにけり、

あとに残った二人の下人。